

た様子である。

ついでに信州南佐久郡、田口村、荒船火山兜岩、陣ヶ平、の千曲洪積層の化石植物群は八木貞助氏により地學雜誌、第四十三卷五〇七號に記されてあるのを拜見するに、本植物群は現今の地層の位置と餘り異らざる高地に生育せしもの、由にて、本植物群は當時今よりも約二又は三度低溫なりし時代のものと結論されてある。

然し本植物群を見ると、其當時は今より二、三度低溫なりしと考へられず、只今と同一であつたと思ふ、尤も八木氏はカクレミノやイ、ギリ(?)の存在を重要視されての事ならんが、現今此地方にカクレミノの如き要素の存在する筈がなく何かの誤であらう、若し又萬一あつたとて、それは全く別の意味の見方をすべきである、イ、ギリ(?)はイ、ギリではなくてヤマグハ (*Morus bombycis* KOIDZ.) であると思ふ。

又本化石群は鹽原化石群よりも少々低溫の地にあつたと云はれるが、予は本化石群は丁度今の鹽原地方とも異つた氣溫の下にありしと考へられぬ、鹽原化石群は今の鹽原よりは低溫の處にありしと考へるが、本千曲洪積層の化石群は今の鹽原地方と同一氣候の處にあり得るものである。

それで本信州化石群は鹽原化石群の時代よりは餘程温くなつた時代のものであると思ふ。

ときはまんさく屬 (*Loropetalum* R. BR)

小泉源一

金縷梅科のトキハマンスク屬には三種ありて、其分布の状は全くトサミヅキ屬 (*Corylopsis* S. & Z.) と其軌を一にせり、日本植物學雜誌第四十六卷四三五頁にはイスノキ屬 (*Distylium* S. & Z.) も亦是等と同一分布をなすやうに記してあるが是は誤である、本屬は予の支那中部要素と稱する植物地理上の分子であつて、三種の中最も廣く分布するは、トキハマンスク (一名ケイノキ) (*Loropetalum Chinense* OLIVER) で東は西南日本の外帶から支那中部南部より印度 Khasia 山地に至り、*Loropetalum subcordatum* OLIVER は廣東地方に分布し、他の第三種は 1930年董爽秋氏印度 Khasia 山地産のものを發見し *Loropetalum indicum* TONG と云へり。

コマメグサ屬の新種

小泉源一

四國、伊豫國、赤石山の山腹にはツガザクラ (*Phyllodoce nipponica* MAKINO) と云ふ高山植物が、一ぱいに生へてゐるが、其處は暖帶林の終り、シロモジ (*Benzoin*

trilobum S. & Z.) よりも遙か下帯にあるから實に面白い事實である、勿論其處は生態條件は他と著しく異つてゐる、住友銅山の直ぐ傍だから誰しも見學すべき處である。

此赤石山に *Euphrasia* の一種で極めて蕞爾たるものを産する、ホソバコバメグサ區 (*Angustifolia*) のもので新種であるから、ナヨナヨコバメグサ (*Euphrasia microphylla* KOIDZ. n. sp.) と命ずる。高さ 9—5 cm. 莖は繊細糸状にして下より少しく分枝し又は單莖なり、白い微毛を生ず。葉は狭細楔形にして、長さ 1—4 mm に過ぎず、無毛にして先端に三齒を有するのみ、苞亦葉状にして微小形三齒あり、藻内に種子は一、二ヶを有するに過ぎず。

Euphrasia (*Angustifolia*) *microphylla* KOIDZ. n. sp.

Caulis minute albo-puberulus, 5—9 cm. altus, gracile tenuissimus, a basi pauciramosus vel simplex. Folia anguste obcuneata 1—4 mm. longa glabra utrinque dente unico praedita. Capsula margine minutissime ciliolata seminibus in utraque loculo 1—2.

Hab. Japonia: Prov. Iyo, mt. Akaishisan.

抄 録

大石三郎氏: 日本レーチック世植物の研究 (S. ŌISHI: The Rhaetic Plants from the Nariwa District, Prov. Bitchū. 北海道大學理學部紀要、第一卷第三及四號、p. p. 257—370, t. t. 19—53, 1932) (Rhaetic Plants from Prov. Nagato. 同上第二卷、第一號、p. p. 51—67, t. t. 9—10. 1932)

日本群島に於ける化石陸生植物の最古の Flora は三疊紀最上部のレーチック Flora である、何人も我國本土の最古陸生植物區系の一般を知らんと欲する人は宜しく此著者傾注の本論文を一覽せられん事を薦める。本論文は殊に本邦 Rhaetic Flora の豊富なる備中國成羽町附近産に就き従來及び著者の綿密なる探究の結果を綜合せしもので、大なる努力の跡は歴々たる近來の快著である。

中生植物代 (Mesophyticum) は、有名な古生植物代の二疊石炭紀植物群の後を受けて新に二疊紀後半世に始まり下部白堊紀まで繼續したもので、之を三紀に分ち得る、古紀は二疊紀後半世より三疊紀前半世まで、中紀は三疊紀後半より中部侏羅紀まで、而て新紀は上部侏羅紀より下部白堊紀 (Komancheum) 迄である。前紀の植物區系は第一に先づ二疊石炭紀植物の殘留が可なりあるが原始羊齒類 (*Primo-filices*) や *Cordaites* は全く絶滅し、羊齒類ではゼンマイ科、ヘゴ科、タカワラビ科等が始て